

京都大学若手人材海外派遣事業 ジョン万プログラム（職員派遣）  
平成28年度事務職員短期派遣プログラム報告書

研 修 者	職 名	総務部人事課 掛員
	氏 名	塚原 美緒
研 修 先 等	渡 航 先 国 名	タイ王国
	研 修 先 機 関 名	京都大学 ASEAN 拠点
	研 修 期 間	平成28年4月5日～平成28年9月27日
具体的な研修内容	<p>1. 概要</p> <p>ASEAN 地域における研究、教育、国際貢献を支援するため平成26年6月にタイ王国・バンコクに設置された本学 ASEAN 拠点において、平成28年4月から9月まで、6ヶ月間にわたって拠点の運営業務に携わった。ジョン万プログラムで ASEAN 拠点に派遣された職員としては8人目となる。</p> <p>業務としては、拠点運営にかかる総務業務、会計業務、拠点スタッフの出張手続き、拠点所長及び現地スタッフの勤怠管理、学内会議に向けた資料作成等を担当した。また、国際的な業務としては、バンコク、チェンマイでの留学フェアへの参加、タイに海外事務所を置く日本の大学による連携組織「在タイ大学連絡会（JUNThai）」の運営、ミャンマー・ヤンゴン及びラオス・ビエンチャンにおける日本大使館及び教育関連機関の訪問、マレーシア・クアラルンプールで開催した「京都 ASEAN フォーラム2016」に参画した。業務外では、タイ語の学習やタイ国内及び近隣諸国の観光等を通じて、現地の文化に触れるよう努めた。</p> <p>2. ASEAN 拠点運営業務</p> <p>当拠点は拠点所長、URA（University Research Administrator）職員、事務職員、現地スタッフが配置されており、平成28年3月に JASTIP（日 ASEAN 科学技術イノベーション共同研究拠点）コーディネーターも新たに配置されたことから、平成28年度からは日本人4名、タイ人1名の5人体制となった。</p> <p>運営業務において他の海外拠点と大きく異なる点は、現金管理を伴うことである。タイではオフィスビルへの賃貸料等様々な支払いにおいて現金払いが求められることから、ASEAN 拠点では大学本部から外国送金された仮払金を管理、運用している。経理の基礎知識が無いうえ、小数点を伴う現地通貨の取り扱いにも慣れず、仮払金の取り扱いには神経が磨り減る</p>	

思いをした。

言語の面では、オフィス管理や物品購入等、日常的な場面においてタイの業者とのやり取りが必要になるが、基本的にタイ語しか通じないことが多かった。そのため拠点の現地スタッフにその都度英語で事情を説明し、通訳してもらった。拠点の日本人スタッフとは日本語でのコミュニケーションとなるため、英語を用いた業務はこの現地スタッフとのやり取りが中心であった。

なお、現地スタッフは英語が堪能であり、細かな事にも気づける非常に優秀なスタッフであった。拠点所長や URA 職員が出張等で不在の際は事務職員と現地スタッフの 2 人で留守を任される機会も多く、円滑な拠点運営ができたのはひとえに現地スタッフの存在が大きかったといえる。

### 3. 各種イベントの参画、出張等

#### (ア) 日本留学フェアへの参加

タイでは在タイ日本国大使館や独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO) 主催の日本留学説明会が頻繁に開催されており、次の留学フェアに参加した：①在タイ日本国大使館及び JASSO 共催留学フェア”JUNE Fair” (平成 28 年 6 月開催、バンコク) ②”JASSO 主催日本留学フェア” (平成 28 年 8 月開催、バンコク・チェンマイ)。

留学フェアでは参加大学・機関ごとにブースを出展し、留学希望者は興味のあるブースをそれぞれ訪問する。JUNE Fair は主に大使館推薦国費外国人留学生志願者及び出願者を対象としており、大学及び語学学校等 29 機関が参加、来場者が 5 日間で 487 名 (うち本学ブース訪問者は 118 名) であった。JASSO 主催日本留学フェアは高校生・大学生等留学希望者等を対象とした規模の大きなもので、チェンマイでは 43 機関、来場者 958 名 (うち本学ブース訪問者は約 70 名)、バンコクでは 83 機関、来場者 3,426 名 (うち本学ブース訪問者は約 170 名) であった。こちらは両会場ともに 1 日のみの開催である。

留学フェアへの参加にあたっては、事前に留学案内の冊子を読む等準備を行ったものの、実際は当日になって学ぶことの方が多かった。本学への留学希望者からの質問内容は、希望するテーマを有する学部・研究科の有無、希望する課程への入学方法、英語のみで取得できる学位の有無、奨学金情報等さまざま、いずれも分からないことばかりだったため、URA 職員や現地スタッフ

に教えてもらいながら回答していった。

来場者には親子で参加している方々も多く、中には親の方が積極的に質問してこられるケースもあった。後に現地スタッフに聞いたところ、タイでは進学及び希望学部の決定には親の影響力が大きいとのことで、日本にも通じる現象だと感じた。一方で、タイに滞在している日本人親子の参加も少なくなかった。親御様から話を伺う中で、子供がタイの日本人学校もしくはインターナショナルスクールに通っており、大学からは日本で学びたいと考えて留学フェアに参加したというケースが多かった。

ASEAN 拠点においてはジョンワプログラム職員の留学フェアに対する積極的な参加が期待されていることから、留学に関する予備知識の必要性は強く感じた。派遣前に派遣職員への参考資料提供や事前説明があるとより望ましいように思う。

#### (イ) 在タイ大学連絡会”Japanese Universities’ Network in Thailand: JUNThai”の運営

タイ国内では 40 以上の日本の大学が、バンコクを中心に海外連絡事務所（リエゾンオフィス）、海外拠点事務所やセンターを設置し、海外での学生確保や留学希望者の開拓、研究者及び学生交流、共同研究の推進のための諸活動を行っている。

こうした中で、日本の大学間での情報交換、活動の相互連携、またタイの大学へ向けての情報発信、そして現地に勤務する教職員の親睦を図るための連携を目的として、京都大学、大阪大学、東海大学、明治大学等が中心となって JUNThai が平成 27 年 1 月に設置された。平成 28 年 10 月時点で 38 大学が加盟しており、その他の学術関係機関（在タイ日本国大使館、日本学術振興会（JSPS）バンコク研究連絡センター、JASSO タイ事務所等）もオブザーバーとして参加している。

本学は平成 28 年度から 2 回目となる幹事校を務めており、私は同連絡会運営にかかる事務業務を主に担当した。具体的には、3 ヶ月に 1 回開催する会合にかかる連絡及び準備等を行った。

会合は 2 部構成で、第 1 部講演会では設定したテーマに基づき 2～3 名の講師から発表があり、第 2 部連絡会では各大学からの報告や JUNThai の運営にかかる内容について協議等を行う。開催にあたって、幹事校は講演テーマの設定、講師依頼、報告事項及び協議事項のとりまとめ、出欠確認等を行うことになる。当会

合の運営には、在タイ日本国大使館に会場の提供等、多大な協力をいただいております、第8回会合（平成28年8月開催）では、駐タイ日本国大使に『日タイ間の産業人材育成協力』という内容でご講演いただきました。大使の貴重なご講演とあって、当日は70名以上の参加があった。

JUNThai にかかる業務をきっかけとして、他大学・関係機関の教職員の方々と関係を築けたことは非常に有意義であった。

なお、「教職員」にはタイ人スタッフも含まれている。タイに事務所を置く大学の多くは本学と同様、現地職員としてタイ人を配置しており、日本への留学経験のある方、タイの大学で日本語専攻だった方も少なくなかった。同じ幹事校であった名古屋大学、芝浦工業大学では、タイ人が事務所運営の要となって、JUNThai への参画のほか、産官学連携にかかるタイの大学や企業とのやり取りを行っていた。海外拠点における現地職員の役割及び活用方法については、本学でも参考にすべき事柄と感じた。

#### (ウ) ASEAN 諸国の大使館及び教育関連機関の訪問

本学国際化推進に向けた事務職員の実践的研修として、8月10日～11日にミャンマー出張、同月30日～31日にラオス出張の機会を得た。

ミャンマー出張では、拠点所長とともにヤンゴンに2日間滞在した。1日目に在ミャンマー日本国大使館を訪問のうえ、ASEAN 拠点の取り組みを紹介するとともに、書記官の方々からミャンマーでの学術動向について説明を受けた。日本の大学の中にはヤンゴンに現地事務所を設置し、駐在で日本人留学生コーディネーターを配置する等、留学生獲得に向けた独自の取り組みを実施するものもあった。また、近年 Facebook での広報活動も活発になっており、イベント PR に SNS の活用が主流となっているとのことだった。

また、当該出張においては拠点所長が行っているフィールド研究にも立ち会うことができた。1日目にヤンゴン大学において共同研究者の方々との打合せに参加させていただき、2日目にはヤンゴン Thanlyin Museum にて実施した奈良文化財研究所による3次元レーザー測定にも立ち会った。

ラオス出張では、拠点所長及び JASTIP コーディネーターとともに在ラオス日本国大使館及び JICA 事務所を訪問し、ASEAN 拠

点及び JASTIP プロジェクトの取り組みを紹介するとともに、ラオスでの学術動向及び京大との学術連携のあり方について説明を受けた。他国を訪問することで、一括りに称している「ASEAN」の中でも、文化的な違いや国の発展度合いにも差があることを、身をもって学ぶことができた。

(エ) マレーシア・クアラルンプールで開催した「京都 ASEAN フォーラム 2016」の参画

9月8日～9日にマレーシア・クアラルンプールで開催した「京都 ASEAN フォーラム 2016 -WINDOW to ASEAN: International and Innovative-」は、研修中に自分が関わった中で、最も大きなイベントであった。

当フォーラムは本学が主催し、本学と ASEAN 関係者が、日本－ASEAN の学術的交流・発展、また将来のビジョンについて話し合う機会を提供する事を目的に、2日間にわたって開催された。フォーラムには、マレーシアを中心に ASEAN 及び日本の 8ヶ国から延べ 250 名以上の参加があり、本学から山極総長、稲葉理事・副学長のほか、ASEAN 拠点ネットワーク会議参加部局より 30 名が出席した。

フォーラム運営にあたって私がメインで担当したのは、ASEAN 各国の招聘者対応、学内の ASEAN 拠点ネットワーク会議参加部局への意向調査業務、当日の受付業務等である。

当フォーラムでは ASEAN10ヶ国から参加いただくことを目標としており、各国から 1 名ずつ招聘するべく、まずは招聘対象者にそれぞれコンタクトを取るところから始めた。その後、招待状の送付、旅行会社及び大学本部とマレーシアへの招聘手配にかかる調整連絡を行った。今回は招聘したのは 8 名であり拠点開所式等と比べれば少数であったが、突然の欠席連絡やフライトの変更依頼等、当日まで気の抜けない状況であった。これまで国際的なイベントの後方支援業務を経験したことのない私にとっては、英語のメール一通打つのも一苦勞であり、また招聘の流れも理解するまでに時間を要した。その点、拠点の開所式をはじめとするセレモニーや国際シンポジウム等の運営を経験してきた拠点所長や URA 職員から、メール文案の添削から送付資料の内容に至る細かな部分まで、指導・助言をいただいた。

また、国内で開催する会議とは違い、会場がタイでも日本でも

ない第3国であったため、事前出張で現地確認を行った一部のスタッフ以外は、フォーラム当日に初めて会場に入り、かつスタッフ同士の初めての顔合わせとなった。そうした条件の中、私は、現地イベント会社の中国人スタッフの方々と共同で受付業務を担当したが、ASEAN 各国から多数の参加者の受付対応を英語で行うのは想像以上に大混乱であった。当日を迎えてみないと分からないことばかりではあったが、受付名簿の簡易化、要人の顔を把握しておく、当日スタッフ向けの説明資料等、事前に準備できることはもう少しあったように思う。

反省も多いが、この京都 ASEAN フォーラムは①ASEAN 拠点が主導し、スタッフが総動員で臨んだイベントであったこと、②多種多様な国籍・業種の人たちと協働する国際的なイベントであったこと、以上の2点において自分にとって印象深いものとなった。

#### 4. ASEAN 拠点運營業務外の取り組み

日常生活の中で現地語習得の必要性を感じたことから、週2回語学学校に通い、タイ語を学んだ。聞く・話すに特化して学習したことで、徐々にではあるが聞き取れる単語が増え、初対面の人との挨拶やレストランでの注文等の場面においてタイ語で簡単なコミュニケーションが取れるようになった。また、同時期に現地スタッフが日本語を学び始めたため、日本語とタイ語を互いに教え合うことができ、言語を学ぶ面白さを改めて感じた。

休日には、タイ国内の寺院や市場等を巡るほか、近隣諸国を訪れた。人々の生活に信仰が根付いている様子や日本とタイの仏教の違い等、実際に足を運ぶことで学べたことも多かった。

本学の国際化に対する研修成果の活用方法・フィードバック

本学の打ち出す WINDOW 構想においては、国際化にかかる重点戦略として「次世代を担うグローバル人材の育成と育成基盤の強化」や「国際的な研究環境・研究支援体制の整備」等の施策を掲げている。私が参加したジョン万プログラムは、国際関係業務の実務を経験させ、実務能力の向上にとどまらず国境を越えた人的ネットワークの構築および語学のスキルアップを実現する機会を設けている。平成 28 年 4 月から 9 月の半年間の研修を終え、同年 10 月からは教育推進・学生支援部 国際教育交流課 留学生支援掛に配属となった現在の状況を踏まえて、研修成果を整理するとともに、今後の活用について検討したい。

まず、国際関係業務の経験である。現在所属している国際教育交流課においては、外国人留学生の受け入れに関すること、特に外国政府派遣留学生を含む私費留学生の奨学金等を担当しており、今回の研修から継続して、本学の国際業務に従事できている。連続性があることの利点として、一つは英語での連絡業務や文書作成についても、以前と比べて抵抗なく行えるようになったこと、そしてもう一つは、海外で得られた知見を反映しやすいたことが挙げられる。例えばタイやマレーシアといった ASEAN 地域から来ている留学生に対する理解は、研修前と後では大きく異なる。特に、先述の京都 ASEAN フォーラム 2016 ではマレーシア人留学生による同窓会の協力が非常に重要な役割を果たしており、卒業後に母国の高等教育機関で活躍する留学生の存在を知ることができた。本学への留学生支援は将来の研究者の育成及び本学と海外の高等教育機関間の連携促進につながるものであり、本業務を通じて国際的な研究環境・研究支援体制の整備に貢献していきたい。

次に、拠点運営にかかる全般的な業務経験を挙げたい。日常的に行う拠点内の予算管理や備品購入・管理、パンフレット類の郵送依頼、出張処理、車や航空券の手配、派遣職員の勤怠管理等、列挙すればきりが無いが、拠点運営は小さな業務の積み重ねで成り立っている。派遣前に所属していた部署は大所帯であったため、事務職員 1 人で何でも行うのは初めてのことであった。本学では、規模の大きさから業務が分担され、一つの掛の中だけでは決して携わらない業務もある。経験の浅いうちからこうした全般的な業務を経験できたことは、今後自分が携わるすべての業務に生きてくるように思う。

そして、事務職員 1 人という環境に半年間身を置いたことで、教員や専門職員との考え方の違い、業務の進め方の違いにも改めて気づかされた。先述した京都 ASEAN フォーラムの運営等、拠点所長や URA 職員と協働

して業務に取り組む機会は多かったが、話の展開が速く、理解が追いつかないこともままあった。会話をしながら思考を整理させていく研究者らしいスタイルは、私の目には非常に新鮮に映った。今後、教員や専門職員と協働するうえで踏まえておかなければならないことである。

また、研修成果とは少し異なるが、ここでジョン万プログラムについて、再度振り返りたい。タイに滞在中、他の日本の大学関係者の方々に自分が事務職員である旨を伝えると、驚かれることが多かった。事務職員を短期間ながら継続して常駐させている京都大学の取り組みは、他には無いものであったからである。先述したように、タイに海外拠点事務所等を設置している日本の大学は 40 以上あるが、現地で常駐のスタッフがいる大学は限られている。さらに、常駐スタッフがいる大学であっても、そのほとんどは教員 1 名、現地スタッフ 1 名、あるいは現地スタッフのみという体制であった。つまり、大学の事務職員が海外拠点に駐在できる機会は非常に貴重といえる。改めて本研修を経験できたことのありがたさを認識すると同時に、このような他大学にはない利点を活かして、職員の国際化をより一層進められるのではないかと考える。他大学の事例では、職員研修として 10~15 人程度を 1 週間タイに派遣させ、タイ及び日本の学術関係機関の訪問等を行っていた。その際、同行していたのは、タイ事務所への出向経験のある事務職員であった。タイで構築した人的ネットワークの活用等、参考になるように感じた。

最後に、職員の国際化についてである。留学説明会でチェンマイを訪れた際、タイの大学教員と意見交換する機会があった。そこで伺ったのは、その大学の国際系部署の職員は海外経験がない者も多く、海外の大学との決め事や取り組み等において、すぐに成果を求める傾向がある、とのことだった。これまで、職員の国際化といえば英語でのコミュニケーション能力向上や海外に関する知識の習得を漠然とイメージしていたが、それだけではなく、国際的事業は成果を出すには時間を要するため、長期的な視野で考えられる能力もまた重要だと気づかされる出来事だった。

本研修を通じて得られた知見や経験は、海外研修であればこそ学べたものと感じている。これらの事を今後の業務に活かしていけるよう努めるとともに、経験を自分だけのものとせず、周囲へ発信していくことで本学に貢献していきたい。